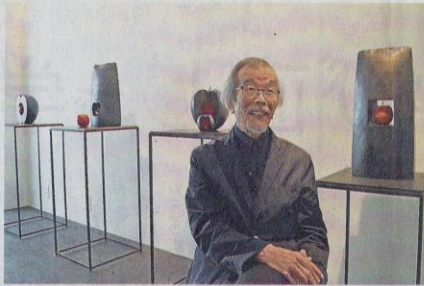


P10 美術欄 艸居での川上力三先生個展の記事が掲載されました。

「手が脳と同時に動く。ヒントは手先から生まれるんです」と語る川上力三(京都市東山区古門前通大和大路東入ル・艸居)



トピックス

「見る人に想像を委ねられる素材」という。戦後復興期を生きた川上には、「リ

リング素材に広がる想像

■「川上力三 距離と時間と」

それぞれの「黒」

るのは、つややかな赤いリング。まるで、想像の中のリングが落下し、へこみから現実へ降り落ちたよう。空想の距離と時間が浮かび上がる。リングの中にリングがあったり、切断面が入り子になったり。「黒は色彩や形など、自由な想像が広がる」と川上はいう。リングはニュートンの引力、聖書、白雪姫など、

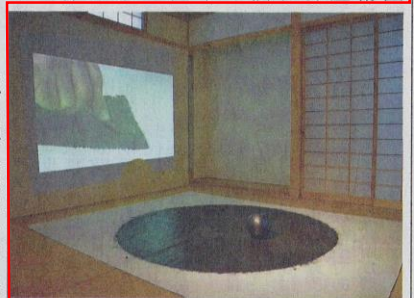
戦後美術をけん引した前衛美術集団「走泥社」と前衛美術集団「具体美術協会」。それぞれ活躍した作家川上力三(1935年)と松谷武判(37年)の展覧会が、京都市内でおおの開かれている。ペテラン二人は、独自の「黒」を探究している。走泥社同人だった川上は、作陶60年目。変動する社会を背景に「座」「位相」「距離」など多彩なシリーズを生み出してきた。艸居(東山区)の「距離と時間と」展(28日まで 日月休 無料)は、黒陶の陶体とリングの立体を組み合わせた新作がメインを飾る。例えば、黒陶の立体面にリングの赤い輪郭が線描され、すその下に同じ形のくほみが穿たれる。その前に置かれ

身体で探る日本美の深さ

■「松谷武判 『松谷』と『MATsutANI』のあいだ」

和室の作品「円」は、黒鉛で円く塗られたキャンバス上に、鉛筆で塗り込められた特有の黒光りした球体がある。光を帯びた無限の濃淡は、黒とは何か、闇、影とは何か、身体感覚を通じて日本人の美意識の芯を揺さぶる。映像は、構成作家奥村恵美子と映像作家藤原次郎が10年間、松谷を追って制作。壁に投影される映像は、作品「円」の影と重なる。松谷は「29歳で日本を離れたが、伝統の心、価値観は消せない。日本の精神とは何か、アーティスティクが問わないと、新しいものは生まれない」と話す。(河村亮)

一方、若くして具体に参加した松谷は、乾燥した接着剤の皮膜の有機的な質感、流感に美を見いだした。その「黒」は接着剤に含まれる鉛筆の粉、紙や布ににじませる墨から生まれる。底流にあるのは悠久の時間、東洋的な感性だ。アートスペース「北区」の『松谷』と『MATsutANI』のあいだ」展(29日まで 月休 無料)は、バリ掘点50年となる松谷の創作やパフォーマンス映像を交え、作品計8点を紹介する。



インスタレーション作品『松谷』と『MATsutANI』のあいだ 2016(北区堀川通今宮一筋下ル東入ル・アートスペース感)